

研究ノート

医学英語とギリシャ神話に関する基礎的研究

平井 美津子

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

要旨

古典ギリシャ語は、古代から近世にかけて西欧文化に大きな影響を与えた。特に医学の分野では、古典ギリシャ語を語源にする用語が多く、そのため難しいと思われがちである。しかし、その語源を理解することがほとんどないままに、単語を習得していかなければならない。今回、古典ギリシャ語と関わりの深いギリシャ神話にまつわる医学英語を取り上げた。物語には興味深いエピソードも多く含まれ、ギリシャ神話を通して、その語源を知ることによって、医学英語に対する興味を引き出すことができるものと考えられる。

キーワード

医学英語、ギリシャ神話、古典ギリシャ語

1. 問題提起

医学英語は、何となく不自然な感じのする英語であるため、難しいという先入観をもつ人が多い。このような医学英語に対し、まず最初にどのようなアプローチをしていけば学生が興味をもち、医学英語に対する教育効果を高めることができるのかを模索してきた。

医学用語は歴史が古く、古代ギリシャの医学の父ヒポクラテス (Hippocrates: BC468-377) が、医学に関する著作を母国語であるギリシャ語で書き、科学としての医学を発展させたことから始まる。その後ローマ帝国 (BC27-1453) の繁栄とともに、古代ローマ人はギリシャ語を多く取り入れてローマ語化していき、同時に彼らの言語であったラテン語も医学の言語として取り入れていった。さらに16世紀のルネサンス期以降、英語圏での知識の拡大に対応するために、多数のギリシャ語・ラテン語が英語の中に取り入れられた。

このような発達段階で成り立った医学英語には、古典ギリシャ語に由来するものが多く、ギ

リシャ神話にまつわるものが見受けられることから、具体的にギリシャ神話中のどのような登場人物と関わりがあるのかを調べた。

2. 関わりのある医学英語

まずステッドマン医学大事典 (2008) から、なぜこの語源からこの語ができたのか、と疑問に思った医学英語を取り出した。そしてそこからギリシャ神話の登場人物と照らし合わせ、ギリシャ神話との関わりがあるかどうかを分析したところ、以下の医学英語が見出された。

1. Achilles' tendon
2. aphrodisia
3. arachnoid
4. edema
5. eroticism, erotism
6. geriatrics
7. gigantism
8. heliosis
9. hygiene & panacea

10. hypnosis
11. iris
12. lymph
13. morphine
14. narcissism
15. nycturia
16. nymphomania & satyriasis
17. Oedipus complex & Electra Complex
18. psychiatry
19. thanatos
20. uranoschisis
21. -ium

これらの医学英語を理解する前に、まず基礎知識として、松村(2008)をもとに、ギリシャ神話の概略を説明し、これをもとに語源的な解説およびギリシャ神話にまつわるエピソードを加えながら紹介していく。

3. ギリシャ神話とは

ギリシャ神話は聖書と並んで、西洋文化の根幹をなすもので、古くから古代ギリシャ人によって伝承された口承文学である。紀元前8世紀、古代ギリシャの二大詩人、ホメロスの『イリアス』『オディッセイア』、ヘシオドスの『神統記』によって、今に伝わるギリシャ神話の原型が作られた。紀元前146年にギリシャがローマ帝国の支配下になったことで、古代からローマに伝わる物語とギリシャ神話が結びついて、ローマ神話が誕生した。その後ルネサンス期にはギリシャ・ローマ神話をテーマとした芸術作品が数多く生み出された。

ギリシャ神話は大きく分けると次の3つに分けられる：

1. 天地創造
2. 神々の物語
3. 英雄たちの物語

ギリシャ神話は、世界の始まりは漠然とした

果てしない暗黒の空間カオス(chaos)¹⁾であったということから始まる。そこに大地の神ガイア(Gaia)、奈落の神タルタロス(Tartaros)、愛の神エロス(Eros)、暗黒の神エレボス(Erebos)、夜の女神ニュクス(Nyx)、さらに光の神アイテル(Aither)、昼の女神ヘメラ(Hemera)が誕生した。ガイアは単独で天空の神ウラノス(Uranos)を生んだが、息子であるウラノスと交わり、男神6神、女神6神から成るティタン(Titan)神族を誕生させた。さらに二人の間に三人二組の巨人が誕生したが、その奇怪な姿から父ウラノスに嫌われ、彼らは奈落に封じ込められてしまった。ガイアはこれにひどく憤りを覚え、息子クロノスに命令して、鎌でウラノスの男根を切断させた。その肉片は海に落ち、周りに白い泡(ギリシャ語 *aphros*)が生じ、その中から愛の女神アフロディテ(Aphrodite)が誕生した。以後、天界の主権はウラノスから息子のクロノスに移る。クロノスは、姉レアを妻として、男神3神、女神6神を誕生させた。この6神がオリュンポス(Olympus)12神という。

以上がギリシャ神話の天地創造後の神々の概略である。これらの神々と関わりがある英雄たち、例えばヘラクレスやペルセウスなどが登場し、困難に立ち向かいながら活躍し、ギリシャ神話に彩りを添える。

4. 医学英語とギリシャ神話

ギリシャ神話にまつわる医学英語の具体的な物語やエピソードを以下に示す。なお、語源に関しては、参考文献に示したすべての文献から著者自らが分析したものである。

4-1 Achilles' tendon (アキレス腱)

踵骨腱(ショウコツケン)のことを一般にアキレス腱(Achilles' tendon)という。このAchillesは、英雄アキレウス(Achilleus)に由来する。

アキレウスが生まれてまもなく、彼を不死

身にするため、母である海の女神テティス (Tethys) が、アキレウスのかかと (アキレス腱周辺) をもって冥界のステュクス河に浸した。その時、母がかかをつかんでいたため、その部分を河に浸すことができず、そこがアキレウスの急所となった。やがてアキレウスはトロイア戦争で勇将となったが、敵将パリス王子に唯一の弱点であるかかとを矢で射られて亡くなった。そこからかかとの部分を Achilles' tendon というようになった。またその故事から、日本語のアキレス腱は「一番の弱点」も意味するようになった。

4-2 aphrodisia (性欲亢進)

Aphrodisia (性欲亢進) の語源となったアフロディテ (Aphrodite) は、愛と美の女神で、ローマ神話ではビーナス (Venus) に相当する。Aphrodite という名前は、3節で述べたように、ギリシャ語 *aphros* (泡) が語源となっている。

精神的な愛がプシュケ (Psyche) (4-18参照) で描かれたのに対し、Aphrodite は肉体的な愛の象徴としてみなされた。このことから、ギリシャ語 *aphrodisios* (アフロディテに関連すること) を語源とする aphrodisia は「性欲亢進」を意味し、さらに *aphrodisios* から派生した *aphrodisiakos* (性欲を引き起こすこと) を語源とした aphrodisiac は「催淫剤、媚薬」を意味する。

4-3 arachnoid (クモ膜)

Arachnoid は arachn-「クモ」+ -oid「形」から成り、「クモ膜」を意味する。この arachn- はギリシャ神話に登場する若い機織娘アラクネ (Arachne) に由来する。

アラクネは、小アジアの小さな町に住んでいた機織りの名手であった。ある時、彼女は知恵・芸術の女神アテナ (Athena) と機織りの勝負しても負けないと豪語した。これを聞いたアテナは機織の勝負をしたが、アラクネの織った

織物が、神を敬わないおごった心を反映したものであったことから、立腹したアテナはアラクネをクモの姿に変えてしまった。このことから、ギリシャ語ではクモのことを彼女の名をとって *arachne* と呼ぶようになり、さらにフランス語やスペイン語などのクモの語源ともなった。医学では、クモ膜 (arachnoid) は脳を保護する3つの膜のうちの1つで、クモの巣のような構造になっているため *arachne* を語源として名付けられた。

4-4 edema (浮腫)

「浮腫、水腫」を意味する edema は、acroedema (先端浮腫) angioedema (血管浮腫) lymphedema (リンパ浮腫) などの医学英語を作る。この edema はギリシャ語 *oidein* (腫れる) から派生した *oidema* (浮腫) を語源とする。また *oidein* は、ギリシャ神話に登場する王オイディプス (Oedipus) の語源でもある。

オイディプスは、テーバイ王ライオスと王妃イオカステの息子である。ライオス王は神託により、子供の手にかかって死ぬことを知った。恐怖に駆られた王は、子どもが生まれるやいなや、足にピンを突き刺して、山に捨てさせた。その子は羊飼いに拾われ、コリントス王ポリュボスのもとで育てられた。コリントス王は、その子を「足が腫れた者」を意味する *Oedipus* (*oidein*: 腫れる + *pous*: 足) と名づけた。この『オイディプス王』は、現代も演劇で取り上げられることが多いギリシャ悲劇の最高傑作である (4-17参照)。

4-5 eroticism, erotism (性的興奮)

一般に「性愛」、精神分析学で「生の本能」と表される eros は、愛の神エロス (Eros)²⁾ に由来する。3節で述べたように、エロスはカオスに次いで誕生した原始の神の一人とされ、愛の女神アフロディテの従者として容姿端麗な青年として描かれた。時代を経てエロスは、アフロディテの息子として描かれるようになって

から、その姿は幼児化し、背中に翼を持った愛らしい表情となった。ローマ神話ではエロスはラテン語 *Cupido* (クピド) と呼ばれ、これが語源になって英語では *Cupid* (キューピッド) といわれるようになった。

古代ギリシャでは「愛」には4つの形 (*eros*, *phileo*, *agapao*, *stergo*)³⁾ があるとされ、*eros* は性愛 (sexual love) を意味した。このことから *eros* を語源とした *ero*(*o*) は「性愛、性欲」に関わる意味を作り出す。例えば *erotic* (性愛の、性欲をかきたてる)、*eroticism* (エロチズム、性的興奮)、*erotomania* (色情狂) などである。

4-6 geriatrics (老年医学)

ギリシャ神話に登場する痩せた無力な老人として描かれるゲラス (*Geras*) は、原始の神の一人で、老年の神である。老年はギリシャ語で *geras* といい、*geras* + *iatros* (医師) から *geriatrics* (老年医学) という語が作られた。ちなみに「老年医学」を表す別の語に *gerontology* があるが、これはギリシャ語 *geron* (老人) + *logos* (語) から成る。

4-7 gigantism (巨人症)

「巨人症」を意味する *gigantism* は、*gigant-* 「巨人」+ *-ism* 「(病的) 状態」から成る。この *gigant-* はギリシャ語 *gigas* が語源となっている。*Gigas* は、天空の神ウラノス (*Uranos*) の流した血で、大地の神ガイア (*Gaia*) が身ごもって生まれた巨人 (*Gigas*) に由来し、英語 *giant* の語源となっている。*Gigas* は単数形で「巨人、ギガス」、*Gigantes* は複数形で「巨人族、ギガンテス」を表す。巨人族は、上半身は人間で、下半身は竜あるいは蛇の姿で表され、巨大な体と力を持つ凶暴な存在として描かれている。

4-8 heliosis (日射病)

日射病は一般に *sunstroke* というが、*helio-*

「太陽」+ *-osis* 「病態」から成る医学英語 *heliosis* も同じ意味を表す。この *helio-* はギリシャ語 *helios* (太陽) に由来する。古代ギリシャ人は、太陽は天空をかける太陽神ヘリオス (*Helios*) の馬車であると信じていた。ヘリオスはティタン神族の男神ヒュペリオン (*Hyperion*) と女神テイア (*Theia*) の息子で、毎朝、炎の馬車に乗り天空を東から西に駆け、また翌朝に備え一晩かけて西から東に戻るといふ太陽の運行を司る神である。

4-9 hygiene (衛生) & panacea (万能薬)

ギリシャ神話に登場するアスクレピオス (*Asklepios*) は、優れた医術で死者をも蘇らせることのできる名医であったことから、神の座につき、現在も医神として西洋医学の象徴的な存在になっている。彼の娘の一人であるヒュグエイア (*Hygieia*) は、健康と衛生を司る女神で、ギリシャ語 *hygies* (健康な) に由来し、英語 *hygiene* (衛生) の語源となっている。またもう一人の娘であるパナケイア (*Panacea*) は、治療の女神で、ギリシャ語 *pan* (すべてのもの) + *akes* (治癒) から成る *panakeia* (全てを癒す) に由来し、英語 *panacea* (万能薬) の語源となっている。

4-10 hypnosis (催眠)

催眠 (状態、術) を表す *hypnosis* は、*hypno-* 「睡眠」+ *-osis* 「病態、状態」から成る。この *hypno-* は、ギリシャ語 *hypnos* (眠り) に由来する。ギリシャ神話で、眠りで人々の心を静める心優しい神ヒュプノス (*Hypnos*) は、眠りの神として描かれている。

風の神アイオロスの娘アルキュオネ (*Alcyone*) は、テッサリア王ケククスと仲睦ましく暮らしていた。ある時、船旅に出たケククスは大嵐で波にのまれ、帰らぬ人となった。しかし、夫の死を知らず祈り続けるアルキュオネをかわいそうに思ったヒュプノスは、息子モルペウス (4-13参照) に、彼女の夢の中にケククス

スの姿で立ち、死を伝えるよう命じた。夢の中で夫の死を知ったアルキュオネは嘆き悲しみ、海に身を投げた。愛し合う二人の悲劇を哀れに思った海の神ゼウスは、二人の亡骸を2羽のカワセミ (halcyon) に変えて再会させ、再び仲良く暮らせるようにした。ちなみに halcyon は Alcyone を語源とし、「カワセミ」「冬至の頃、波風を鎮めるとさせる伝説上の鳥」以外に「穏やかな、平和な」という形容詞の意味も表す。また halcyon days は「冬至前後の穏やかな2週間」を意味する。

4-11 iris (虹彩)

虹の神 Iris (イリス) は、最高位の女神ヘラ (Hera) に仕え、メッセンジャー・ガールとして神々に伝令を伝えていた。彼女はその務めを果たすため、空に虹をかけて道としていた。そのイリスが地上に降りて姿を変えたのが、虹を思わせるような色鮮やかなアヤマメやハナショウブなどのアイリス (iris: アヤマメ属) といわれている。

医学の世界では、色素細胞に富み、虹のようにいろいろな色をみせることから、瞳孔の周りの組織を iris (虹彩) と呼ぶようになった。

4-12 lymph (リンパ液)

英語 lymph (リンパ液) は、ラテン語 *lympa* (澄んだ湧き水) に由来する。もともと *lympa* は、泉や山に住む妖精ニンフ *nymph* に由来し、この *nymph* が、ラテン語に入る際に訛って *lympa* になったといわれている。この *lympa* は「澄んだ湧き水」から「透明な体液」も表すようになり、そこから医学の世界で lymph は「リンパ液」の意味を表すようになった。

4-13 morphine (モルヒネ)

1804年、ドイツの薬剤師ゼルテュルナー (F. W. Sertürner) が、アヘンアルカロイドから純粋な結晶を単離することに成功した。これは強力な睡眠作用を持ち、夢のように痛みを取り

除いてくれることから、彼は夢の神 Morpheus (モルペウス) の morph に、化学物質の命名に用いられる接尾辞 -ine をつけてこの物質を morphine (モルヒネ) と命名した。語源となった Morpheus は人の形を真似て夢にでるという意味から、ギリシャ語 *morphe* (形) から作られた。Morph- は、morphology (形態学)、morphogenesis (形態発生)、metamorphosis (変性、変態) など「形態」に関わる語を作りだす。

4-14 narcissism (ナルシズム)

ギリシャ語 *narke* (麻痺) を語源として narcolepsy (ナルコレプシー)、narcosis (ナルコーシス) などの医学英語が作られている。一方、感覚を麻痺させるような強い香りやその球根が神経を麻痺させる物質を含有することから、*narke* はスイセン (narcissus) の語源にもなっている。

ギリシャ神話に登場する美しい青年ナルキッソス (Narkissos) は、湖面に映った自分に恋をした。彼は寝食を忘れて自分自身に愛を語り続けて、やつれ果て死を迎え、スイセンに姿を変えた。このことからスイセンはナルキッソスの化身といわれる。

この物語をもとに、精神分析医フロイト (S. Freud) は narcissism (ナルシズム、自己愛) という症例を確立した。そして自己愛が強く、自己陶醉型の人を narcissist (ナルシスト、自己陶醉者) と呼ぶようになった。

4-15 nycturia (夜間頻尿)

医学英語 nycturia (夜間頻尿) は nyct-「夜」+ -uria「尿の状態」から成る。この nyct- はギリシャ語 *nyx* (夜) に由来する。また、夜の女神ニュクス (Nyx) は、夜を神格化した原始の神の一人である。このニュクスは、兄弟で暗黒の神エレボス (Erebus) と交わり、光の神アイテル (Aither) と昼の女神ヘメラ (Hemera) を生み、これによって世界に昼と夜、暗黒と光

という正反対の時間と空間ができたといわれる。また彼女は単独でも、人間の存在のありように関わる多数の神々を誕生させた。例えば、老年の神ゲラス (Geras : 4-6 参照)、眠りの神ヒュプノス (Hypnos : 4-10参照)、死の神タナトス (Thanatos : 4-19参照) などともニュクスの子供である。

4-16 nymphomania (女子色情症) & satyriasis (男子色情症)

妖精ニンフ (nymph) は、ギリシャ語 *nymphē* (花嫁、若い娘) に由来する。1955年に出版された小説『ロリータ』の中で、作者ナボコフ (V. V. Nabokov) は、あどけない12歳の主人公ロリータを性的魅力のある美少女として描き、彼女のような少女をニンフェット (nymphet) と表現した。

Nymphē を語源とした nympho- は、医学英語では、女性の性(欲)に関わる語を作り出す。例えば *nympha* (小陰唇) をはじめとして nymphomania (女子色情症)、nympholepsy (恍惚) などである。

一方、nymphomania に対する医学英語として satyriasis (男子色情症) がある。この語の語源となっているのは、ギリシャ語 *satyros* (サテュロス) である。サテュロスは酒の神バッカス (Bacchus) の従者で、酒と女の好きな半人半獣の森の精である。

4-17 Oedipus complex (エディプスコンプレックス) & Electra Complex (エレクトラコンプレックス)

男児が母親に対して強い独占欲をもった愛情を抱き、父親に対して強い対抗意識を燃やす状態をエディプスコンプレックス (Oedipus complex) という。それに対し、女兒が父親に対して強い愛情をもち、母親に強い対抗意識を燃やす状態をエレクトラコンプレックス (Electra Complex) という。両者は精神分析における5歳前後の子供の自我発達概念であ

り、前者はフロイト (S. Freud)、後者はユング (C. G. Jung) によって名づけられた。

エディプス (Oedipus) は、ギリシャ神話に登場するオイディプス王に由来する (4-4 参照)。彼は実の父を父と知らずに殺害し、実の母を母と知らずに関係をもったという物語から、Oedipus complex の語源となった。一方、Electra もギリシャ神話に登場するミケナイ王アガメムノーンの娘エレクトラ (Electra) に由来する。アガメムノーンはトロイア戦争から凱旋した夜、母と愛人によって殺害された。父親を非常に愛していたエレクトラは、母に激しい憎悪の念を抱き、復讐を計画し、弟と共に父の敵をうったという物語である。

4-18 psychiatry (精神医学)

Psychiatry (精神医学) や psychology (心理学) の語源となっている psych(o) はギリシャ語 *psykhē* (心、魂) に由来する。この *psykhē* はラテン語に入って *psyche* (プシケ) となり、さらに英語に入って *psyche* (サイキ) となった。この *psykhē* については王女プシュケ (Psyche) の物語がある。

プシュケは、美の女神アフロディテが嫉妬するくらいの絶世の美女であった。ある日アフロディテは、愛の神エロスに命じて、プシュケを不幸な恋に落とし入れようとした。ところが、プシュケの美しさはエロスまでも魅了してしまった。何も知らないプシュケはエロスの用意した宮殿に導かれ、そこで夜しか姿を現さない正体不明の夫 (エロス) と結ばれ、幸せな生活を送った。しかし、プシュケは顔を見ないという約束を破り、ランプの明りでそっと夫の顔を覗き、愛の神エロスであることを知ってしまった。エロスは自分を疑ったプシュケの心を悲しみ、去ってしまった。

エロスを探し続けるプシュケにアフロディテは、再会するための条件として、到底成し遂げることができない4つの試練を与えた。しかしどんな困難にも耐え、一途に成し遂げたプシュ

ケは、神々のもとでエロスと正式に結婚することができ、神の仲間となった。神となったプシュケは、愛を支えるのは相手を信じる「心 (psyche)」であることを、恋人たちに伝える役目を担うようになったといわれている。

4-19 thanatos (タナトス)

精神医学において、老衰と死に向けられるすべての本能的傾向を意味する死の原理のことを thanatos (タナトス、死の本能) という。この thanatos はギリシャ語 *thanatos* (死) を語源とし、thanatophobia (死恐怖症)、thanatology (死生学)、euthanasia (安楽死) など「死」に関わる医学英語を作る。また、ギリシャ神話で黒い翼を持ち、黒衣をはおり、剣を携えた姿で描かれるタナトス (Thanatos) は、死を擬人化した神である。タナトスは、兄弟である眠りの神ヒュプノス (4-10参照) と共に冥界に住んでいた。ギリシャ神話では、戦場で破れて横たわる戦士のもとに、この二人がどこからともなく現れ、ヒュプノスが苦痛を眠りで和らげ、タナトスが死の世界に運ぶという役割を果たしている。

4-20 uranoschisis (口蓋裂)

天王星 (Uranus) は1781年、イギリスの天文学者ハーシェル (F. W. Herschel) によって発見され、天空の神ウラノス (Uranus) にちなんで、Uranus と名づけられた。Uranus の語源は、ギリシャ語 *ouranos* (天空) である。これに指小辞⁴⁾をつけた形 *ouraniskos* で「天井」を表し、さらに意味が派生して roof of the mouth を表すようになった。ここから *uraniscus* は医学の領域で「口蓋」を表し、*ouranos* を語源とした *urano-* は、*uranoschisis* (口蓋裂) など「口蓋」に関する医学英語を作るようになった。

4-22 -ium (金属元素を作る接尾辞)

ギリシャ神話中の神々や人物に -ium をつけて元素名にしている例も見られる。

helium (ヘリウム)

1868年、イギリスのフランクランド (E. Frankland) とロッキヤー (N. Lockyer) が、太陽光のスペクトル中の黄色の輝線から、それまで知られていなかった未知の元素があることに気づいた。この元素が太陽の観測から発見されたことから、太陽神 Helios (ヘリオス) (4-8参照) に、当時この新元素が金属であると考えられていたことから、-ium をつけ helium と命名された。

iridium (イリジウム)

1804年、イギリスの化学者テナント (S. Tennant) が、塩酸中で溶解すると虹のように色が変わるプラチナに似た白金元素を見つけた。彼は、その新元素を虹の女神 Iris (イリス) にちなんで iridium と命名した (4-11参照)。

palladium (パラジウム)

1803年、イギリスの科学者ウオラストン (W. H. Wollaston) が、白金鉱石を王水に溶かし、できた溶液にシアン化水銀を加えたところ、黄色の物質が沈殿した。これを取り出し加熱したところ、未知の元素があることに気がついた。彼は、当時発見されて話題となっていた小惑星パラス (Pallas) にちなんで palladium と命名した。この Pallas は知恵の女神アテナ (Athena) (4-3参照) の別名でもある。一方、黄色の物質を取り除いた溶液は、パラのような色を呈し、この色の原因が未知の元素であったことから、ギリシャ語の *rhodon* (バラ) から rhodium (ロジウム) と名づけられた。

promethium (プロメチウム)

1947年、アメリカの化学者3名が、原子炉からウラン鉱に含まれる核分裂生成物を取り出し、そこから新元素を分離するのに成功した。この新元素を人間に火をもたらした神 Prometheus (プロメテウス) にちなんで promethium と命名した。

selenium (セレン)

1789年ウラン (uranium) を発見したドイツの化学者クラプロート (M. H. Klaproth) (X uranium 参照) は、1798年にも新元素を単体として取り出した。彼は人類にとって最も重要な惑星である地球 (ラテン語 *tellus*) にちなんで、この新元素を tellur (テルル) と名づけた (英語では tellur + -ium で tellurium という)。

このテルルより後に発見されたのがセレン (selenium) である。1817年、スウェーデンの化学者ベルセリウス (J. J. Berzelius) は、テルルとよく似た性質をもち、周期表上一つ上に位置することから、月の女神セレネ (Selene) にちなんで selenium (セレン) と名づけた。

tantalum (タンタル) と niobium (ニオブ)

1802年、スウェーデンの化学者エーケベリ (A. G. Ekeberg) は新元素を発見した。その分析は困難で、エーケベリは大変じらされた。このことからオリュンポスの神々の主神ゼウスの息子、タンタロス (Tantalus) にちなみ、タンタル (tantalum) と命名した (-um は -ium の異形)。タンタロスはゼウスの怒りに触れ、水を飲もうとすれば水が退き、果物を取ろうとすると果物が退くという、じらされる罰を科された神である。ちなみに「(人)をじらす」ことを英語で tantalize という。

一方、1844年ドイツの鉱物学者ローゼ (H. Rose) が、コロンブ石とタンタル石を分析したところ、タンタルと化学的な性質が似た未知の元素を発見した。彼はタンタルの語源となったタンタロスから、その娘ニオベ (Niobe) の名をとって新元素を niobium と命名した。

titanium (チタン)

1795年、クラプロートが鉱石の成分分析により、特異な性質をもつ未知の元素を発見した。彼は、ティタン神族 (3節参照) の一人 (Titan) にちなんで、新元素をチタン (titanium) と名

づけた。この命名は、オリュンポスの神々との戦いに敗れたティタン神族が、地底に封じ込められたという話から、鉱石中に封じ込められていた元素という意味で titanium にしたといわれている。

uranium (ウラン)

1789年クラプロートが、ピッチブレンドという黒色の鉱物を王水で溶解し、さらにカセイカリで中和したときに生じる黄色い沈殿物の中に、未知の金属が含まれていること発見した。彼は、当時話題になっていた Uranus (天王星) にちなんで、その新元素を Uranium (ウラン) と命名した。

5. まとめ

医学英語は、医療関係の職業に従事しようとする学生にとって必須のものであるが、一方では難しいという先入観をもたれがちな英語である。

今回、ギリシャ神話にまつわる医学英語を取り上げることになった動機として、医学英語が古代ギリシャから始まったこと、さらに語源的にみて、人間的な要素が多く含まれ、西欧文化に大きな影響を与えたギリシャ神話にまつわる語もいくつか見受けられたからだ。

医学英語は、古典ギリシャ語から始まり、ラテン語、さらに近代になって英語、フランス語といった語源の変遷を経ている。また、ギリシャ医学の流れを受け継いだアラビア医学も関わることから、アラビア語由来の語も見受けられる。今回はギリシャ神話に限ったが、ギリシャ哲学、ローマ神話、アラビア医学、さらに、18世紀に起こった産業革命以降、英語圏で医学を含む自然科学が急速に発展したことから、英語圏でのエピソードも多く含まれると考えられる。

6. 今後の展望

外国語教育の分野では、学習事項の背景にあ

る物語やエピソードが外国語習得を助けるといわれている。これは第二言語習得に応用されているスキーマ理論のことをいい、本来、心理学領域から始まったものである。さまざまな先行研究を経て、言語学領域で、Carrel がスキーマ理論を読解授業へ応用して、スキーマを活性化させるための活動を提唱し、現在、読解指導において広く利用されている。

今回取り上げた医学英語は、広く一般の英語学習者が習得するものではなく、かなり限られた分野の英語である。さらに古典ギリシャ語・ラテン語由来のものが多数を占めているため、機械的に暗記するにはかなりの努力が必要となる。しかし、医学英語は長い歴史をもつため、多くの物語やエピソードを背景に含み、これらがスキーマとなって同様に効果を上げる可能性がある。今後はその効果の有無、また効果度を検証してゆく必要がある。

注

- 1) chaos は英語では「混沌」を意味するが、本来は「巨大な暗黒の空間、底知れない割れ目」という意味を表し、そこからギリシャ神話の「天地創造以前の混沌を象徴した神」を表すようになった。
- 2) エロスについては、ガイアやタルタロスと共に誕生したという説以外に、アフロディテの子、ニュクスの子など諸説がある。

3) 「愛」の4つの形

- eros* : 性愛
- phileo* : 愛情
- agapao* : 敬意, 満足
- stergo* : 両親や子供への愛, 忠誠心

- 4) 指小辞とは主に名詞や形容詞につき、「小さい」「少し」という意味を表す接尾辞のことをいう。

参考文献

Baugh, A. C., Cable, T. (永嶋大典訳) (1989) 『英語史』 研究社 .
 Carrell, P. L. (1983) ' Schema theory and ESL Reading pedagogy' *TESOL Quarterly* 17(4) pp.

553-573.

Hesiod (廣川洋一訳) (1984) 『神統記』 岩波書店 .
 Simpson, J. A., Weiner, E. S. C., Burchfield, R. W. (1998) *The Oxford English Dictionary* second edition Clarendon Press.
 大隈敦子 (2005) 「第2言語学習者はテキストをどう読んでいるか」 『国際交流基金 日本語教育紀要』 第1号, 37-51頁 .
 小川鼎三 (1983) 『医学用語の起り』 東京書籍 .
 小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会 (1999) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』 小学館 .
 ステッドマン医学大辞典編集委員会 (2008) 『ステッドマン医学大辞典』 メジカルビュー社 .
 玉尾皓平ほか (2007) 『完全図解 周期表』 ニュートンプレス .
 西村賀子 (2006) 『ギリシア神話』 中央公論新社 .
 丹羽隆子 (1998) 『はじめてのギリシャ悲劇』 講談社 .
 原島広至 (2007) 『肉単』 エヌ・ティー・エス .
 原島広至 (2007) 『脳単』 エヌ・ティー・エス .
 星 和夫 (1996) 『楽しい医学用語ものがたり』 医歯薬出版 .
 星 和夫 (1998) 『続 楽しい医学用語ものがたり』 医歯薬出版 .
 松村一男 (2008) 『もう一度学びたいギリシア神話』 西東社 .
 吉田和彦 (2001) 『語源で覚える医学英語辞典』 メジカルビュー社 .

URL

<http://www.psn.ne.jp/bds/category/greece.htm> (ギリシャ・ローマ神話)
<http://www.etymonline.com/index.php> (Online Etymology Dictionary)
<http://www.ielement.org/index.html> (iElement)
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8> (ウィキペディア)
<http://www.bartleby.com/61/> (The America Heritage Dictionary of the English Language: 4th edition)